

前近代東南アジア史における 「中心－周辺」関係の類型化

1. 研究組織

研究代表者：八尾 隆生（大阪外国語大学外国語学部・助教授）

研究分担者：深見 純生（桃山学院大学文学部・助教授）

桃木 至郎（大阪大学文学部・助教授）

真栄平房昭（神戸女学院大学文学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

地域研究というアプローチが脚光をあびて以来、東南アジア史研究も従来の一國史の枠組みや旧植民地宗主国のブロックを越えた一つの地域としての歴史像を模索する動きが盛んになっている。中国を中心とする朝貢システム論、環シナ海交易ネットワーク論等がそうである。そしてそうした研究が盛んになる際、注目を浴びるのが各サブリージョンの中心である。具体的には朝貢システムならばその王朝の首都、ネットワーク論なら主要港市国家等である。

こうした王朝の首都、主要港市国家に関する研究は、従来の一國史研究でもかなりの研究の蓄積がある。よってそうした個別研究の成果の吸収及び同様の作業の継続なしに壮大な東南アジア史の全体像を結ぶのは不可能であろう。但し、その研究にもまだまだ改善すべき余地がある。従来は多くの制約があって、例えば一國史研究においても、その研究の中心はその国の中央（たいていは王都）にある、あるいは中央で編纂された史料を基にした研究が大半であり、当然その研究のテーマも中央の政治史とか、各サブリージョンの中央間の交渉史（政治・経済面での）に偏っていたこと等の限界があった。従って、各中心と個々のマージナルな地方との関係が等閑視されてきたことは否定出来ない。

最近になって、史家の間でも、地方での調査・史料収集の必要性が認識されるようになり、例えば現地でのフィールドワークや新史料の発掘とそれに基づいた研究を目的とした、大阪外国語大学教授吉川利治を研究代表者とする『国際学術研究（学術調査）東南アジア史における「中央」と「地方」に関する研究』が平成6年度より始められた。八尾、桃木はこの研究班に研究分担者として参加している。

ところが、我が研究班は海外での現地調査を行えないハンディを有しているのであるから、吉川の研究班とは少し研究方法を変えて独自の研究方法を用いる必要がある。具体的には、従

来から研究に用いられている、或いは存在は知られているが、十分に活用されてこなかった史料及び研究業績の徹底調査・再吟味を行い、中央側が自らの「支配」或いは「影響を行使できる」領域をどのように設定していたのかを、そして反対に周辺側がそれに対してどのように自らを位置付けていたかを考察することを研究の目的とする（むろん、独自に収集した新史料の利用を妨げるものではない）。但し「支配」或いは「影響力」といっても様々な形態が存在する。例えば、領土概念、朝貢体制、通商圏、同族・異民族意識とそれに基づく同化・差別化政策等である。

我が研究班では、全員が以上のような形態の内の同じ一つを共通項として取り上げて研究を行うというスタイルはとらない。というのも、どの点に各研究者が注目するか、それがとりもなおさず、各人の専門とする地域のもつ特質を表すことになるからである。具体的には、真栄平が琉球を舞台に生産・流通・貿易関係を、八尾が「小中国」ベトナムの地方統治策、桃木が海洋勢力の一つたるチャンパの東南アジアにおける位置付け、深見がマレー半島内の中心一周辺関係を論ずる。論ずる対象がバラバラという印象を拭いきれないが、そのバラバラであることが何を意味するのかを討論によって煮詰め、さらに最終的には「中心一周辺」関係の類型化の可能性を模索することによって東南アジア史がもつ多様性の理解に貢献することが我が研究班の最終的目標である。

3. 平成7年度の研究経過

本年は以下の如く4回の研究会を開催し、研究班メンバー4名に外部から2名の方の参加をいただき、6名の研究報告を行った。

10月14日(土)於大阪大学

横倉 雅幸「歴史時代初期のマレー半島」

深見 純生「東西交通におけるマレー半島」

11月18日(土)於大阪大学

高橋 公明(名古屋大学)「寧波から来た中国人」

12月4日(月)於沖縄県那覇市ゆうな荘

桃木 至朗「あたらしいチャンパ史像の可能性」

八尾 隆生「15世紀北部ベトナムのムオン族の世界一官邸丁氏囑書の分析から一」

3月23日於大阪大学

真栄平房昭「砂糖をめぐる生産・流通・貿易史—幕藩体制と流通の視点から—」

各発表の概要と成果は以下の通りである。

（横倉報告）マレー半島は古代から交易の中継地として発展したが、発掘進展中の各遺跡の分布地図（本発表はタイ領内に限った）と、美術的考古学的な視点から遺物を分析して編年を行うと、以下のごとくなる。

年 代	鍵となる遺物及び美術様式	遺跡群
2CBC-2CAD	Drum, Aricamedu Ornament, Sa Huynh Ornament	Khao Samkhaeo, Khlong Thom, Phunphin
4-7CAD	Pallava script, Hindu remains, Amaravati, Gupta	Khlong Thom, Wiang Sa Phunohin
7-9CAD	Brick construction, rectangular moat, Dvaravati	Wiang Sa, Si Chong, Yarang
850-875	Ceramics (Islamic, 唐), Mahayana, Java	Chaiya, Takuapa, Nakhorn Si Thamarat
10-14CAD	Chinese Ceramics (宋、元、明), Khmer, Uthong	Nakhorn Si Thamarat Sathinphra, Phatthalung
15-17CAD	Chinese Ceramics (明、清), Sangkhalok, Ayuttaya	Nakhorn Si Thamarat Songkhla, Pattani

上記の時代区分を基にすると、マレー半島の幹線ルートと交易拠点の推移は以下のようになる。

年代	南タイにおける経済活動
2-1CBC	南シナ海及びアンダマン海における国際海上交易の成立 Tapi川流域における内陸水運ネットワークの成立
1-2CAD	Aricameduの隆盛に対するKhlong Thomの台頭
3-4CAD	Khlong Thom-Phunphinルートによる半島横断交易の展開
5-7CAD	Khlong Thom-Wiang Sa-Punphin ルートの繁栄

(深見報告) 横倉報告で明らかにされたようにマレー半島には古代の遺跡が多い。古代をここでは仮にマラッカ王国以前の歴史時代とする。その時代における東南アジア島嶼部西部における中心と周辺の関係についての研究は、文献史学からのアプローチだけでは限界はかなり近い

ところにある。文献資料の量的、質的な限界のゆえである。したがって、この時代を扱うときには考古学的な発掘と調査に第一の希望を託さざるをえない。

とはいえ文献史学の立場から新たな展開の可能性がまったくないわけではない。第一に新たな史料の発見である。例えば1980年代後半によく学界に広く知られるようになった『大徳南海誌』(その存在は1960年代に紹介されていたがなぜか注目されなかった)、また1980年代後半になってパレンバンで発見されたボーム・バル碑がある。ボーム・バル碑はシュリーヴィジャヤ碑文としては4つ目である。第二に既知の史料の再検討であり、本報告はこれに属する。

マレー半島に古代遺跡が多いのは言うまでもなくマレー半島が東西貿易において重要な位置を占めたからである。それは少なくとも3つのレベルで考察すべきであろう。第一にいわば地場レベルで、マレー半島内部の交易である。第二にいわば地方レベルで、東南アジア内近隣地域間あるいはタイ湾・ベンガル湾間の交易である。そして第三に遠距離交易である。遠距離交易においては7世紀にシュリーヴィジャヤが栄えて以来マラッカ海峡がそのメインルートの地位を確立していたと考えられる。ところが現在知られる限りで、遺跡はマラッカ海峡よりもマレー半島中部の方が多い。これは第三の遠距離交易のレベルにおいても、マレー半島中部が重要な役割を担っていたからであろう。ここでいうマレー半島中部は概ねクラ地峡から南、パタニ・クダーより北の部分であり、この間に複数の東西横断ルートが想定可能である。よってマラッカ海峡ルートとマレー半島中部横断ルートが併存した状況を考える必要があるのである。

(高橋報告) 本報告は、i) 人身売買、誘拐等の手段によって日本列島へ移動を余儀なくされた人々に注目し、その具体的様相を社会的文脈の中で検討する。ii) 人々の移動するルートの内、寧波と九州の交通関係に注目し、関連する史料・研究を検討する、の2点を研究のねらいとする。

日本の中世文学を検討すると、倭寇の中世文学への影響が見られる作品が存在する。例えば謡曲『唐船』では日本に連行されてきた明州出身の人物の物語で、彼の職業が決して農業奴隷ではなかったこと、当時の九州では日本の婦人が外国人と結婚することにさほどの抵抗がなかったこと等が読み取れる。

一方、朝鮮人外交官宋希璟の『老松堂日本行録』には15世紀の西日本に少なくとも5人以上の中国人、朝鮮人が居住していたことを記している。彼等の職業はばらばらで、奴隷とひとくくりできない。

倭寇は多くの人間（その出身地としては中国人の場合は浙江省に集中）を日本にもたらしたが、彼等は当時の日本の各地に移動し、必ずしも奴隷と簡単に判別できる存在ではなかった。これは、当時の日本人が人身売買の対象となった人＝奴隷とする、固定観念を持っていなかったことに起因すると考えられる。つまり未だ身分が十分に固定していないという状況を反映したものであろう。

（桃木報告）研究上でも描かれた歴史像の面でも「忘れられた不幸な小国」であったチャンパ研究の、近年におけるフランス、ベトナム、日本その他の劇的な復活ふりを紹介し、その成果と今後の展望を「チャンパ史の諸段階」「東南アジア史の中のチャンパ史」の二つの角度から総合的に論ずる。

チャンパ史の諸段階については、チャンパ国家形成の母体としてのサーフィン文化の研究、海上交易におけるチャンパの位置を示す貿易陶磁研究、大航海時代とそれ以降のチャンパの動きなど、新しい研究が進展する一方、初期林邑に関する文献考証、インド式建築・彫刻の盛衰を国家の盛衰に直結させる「インド化された国家」の研究など、古い研究の中心的諸課題はもはや展望を持たないのである。

東南アジア史の中でチャンパ史を位置づけるならば、まず比較史の観点からはチャンパ国家が地方権力のゆるやかな連合体であること、山地民をふくむ多民族構成を持つ（むしろ非エスニックな構造を持ち、決して「チャム族の国家」ではない）ことなど「東南アジア的国家」の議論にチャンパもあてはめることができる。ついで関係史の視角からは、チャンパが東南アジアのあらゆる地域と文化交流やヒトの交流をもち、周辺から見るとインド文化だけでなく中国文化の窓口にもなっていたこと、こうした関係があったため「チャンパ遺民の子孫」は、様々な民族分類をされつつ、チャンパ文化の痕跡・記憶とともに東南アジアのいたるところに残っていることに注目するべきである。

最後に、大航海時代の終焉、ベトナムにおける東アジア型小農社会の確立が、事実としてチャンパの命脈を絶っただけでなく、研究者にも「定着農民の」「国民国家の」視点を植え付け、チャンパ史の広がりと重要性を見えなくしてきたことが指摘できるのである。

(八尾報告) 本報告では、ベトナムの中心-周辺関係を探るという視点から、少数民族ムオン族首長(官郎)の一族の家に今日まで伝来してきた嘱書について考察する。

ベトナム北部ヴィンフー省タインソン県で発見されたこの15世紀の嘱書(の写し)は、[1]前文(嘱書作成者の氏名や嘱書作成の事由など)、[2]財産目録、[3]例、[4]後文(年号やサインなど)の4つの部分からなる。これと当時の黎朝が作成した文書のフォーマット集とを比較すると一応適合するかの如く見える。しかし、逐一内容を検討していくと、さほど単純ではない。まず、この嘱書には相続者の名が欠けている。黎朝の規定では相続者のすべての名が記され、誰に何を残すのかを子細に書くことを義務づけている。さらに3の「例」は村掟に相当するものであるが、私事に関わるだけのはずの嘱書には本来記される性質のものではない。しかも、その「例」は未来永劫村民が従うことを期待しているのである。よって、嘱書たる要件を欠いていることと、嘱書の範囲を逸脱していることを考えた場合、この文書は嘱書とはいえない。ではこの文書は何であろうか。

本来ムオン族にはこのような首長の権限を文書にして残すという習慣はなかった。そこに15世紀になって強力になったベトナム黎朝との本格的な接触が始まり、それは、5代聖宗の時代に至ってピークに達した。黎朝は拡大政策の矛先を開国からのライバル、ランサン王国に向けた。その両者の間に挟まれたムオン族の中小首長は黎朝の支配秩序に組み込まれ(決して支配されるのではない)、その求める「様式」に従いながらも、その一方でそれらを自らの権力維持の道具にしようとしたのである。そうした作意、具体的には黎朝の文書形式にのっとり勢力圏内部における自らの権限を文書化することで強化しようとしたこと、の結果がこの文書の存在なのである。

(真栄平報告) 『甘さと権力-砂糖が語る近代史』の中で、シドニー・ミンツは次のように述べる。「コーヒーと砂糖がヨーロッパ人の幸福にとって不可欠か否かは知らない。しかし、この二つの生産物が世界の広大な地域に不幸をもたらしたことだけは確実。すなわち、アメリカでは、これらの植物を栽培する土地を求めて、人々が追い払われ、アフリカではそれらの栽培にあたる労働力を求めて、人々が連行されたのである。」(川北穂ほか訳、平凡社)

サトウキビは、元々ニューギニア原産のイネ科植物であるが、世界各地に伝播した。東アジアでは中国、台湾、日本、琉球など、東南アジアではフィリピン、インドネシア、ベトナムなど各地で栽培され、かつてはオランダ東インド会社を通じてヨーロッパへ輸出され、香辛料、ゴム、コーヒーなどの植民地物産と並んで、アジアとヨーロッパとをつなぐ広域流通商品であ

った。

17-18世紀以降、広東や福建から日本へ来航する中国ジャンクの砂糖輸入高が急増した。また、オランダ東インド会社を通じてジャワのプランテーション砂糖が日本市場へ大量に舶載されたこともよく知られている。砂糖の歴史的特質に注目すると、それは甘蔗（サトウキビ）の栽培を通して農業に関わり、さらに製糖過程において工業生産に関わるテーマである。それゆえに、農業から工業が歴史的に分化していく過程をさぐるうえでも、砂糖は一つの重要な研究対象なのである。

4. 研究の成果とフロンティア

この項目に関しては3を参照していただきたい。

5. 今後の課題

研究班メンバーの個別報告に関する課題として、次のような点が報告者自ら或いは研究会参加者から指摘があった。

深見はマラッカ海峡ルートとマレー半島中部横断ルートが併存した状況を考える必要があるとしたが、そのために検討すべきことの一つにモンスーン航海のタイム・スケジュールがある。これが文献史料にどのように現れているか。古代の文献史料（義浄の記述、アラブ史料、『嶺外代答』『諸蕃志』そして鄭和艦隊の航海事情など）から確定できることがらは多くはない。それでも非常に明瞭なことは南シナ海は南行と北行ともにモンスーンの規制力が明瞭である。これに対してベンガル湾では西行だけがモンスーンに明瞭に規定されることである（アラビア海でも同じかと想像される）。こうしたモンスーン事情がマレー半島中部の遺跡群と関わりがあると思われるが、東南アジア遺跡地図を作成中である横倉のような考古学研究者との研究協力が是非とも必要である。

桃木は報告の際、チャンパ史の研究史を纏めたが、碑文、漢籍史料、カンボジアやタイの年代記、欧文史料、近世チャム語史料とその背景をなす近世マレー・ジャワ世界の史料などをもとにした研究が、まだ研究者が不足で未開拓の状況にあるという、史料面でもチャンパ研究が大きな展望と課題をもつことを紹介した。これもとても一人で全てを行なうことは不可能であり、学際的研究が望まれる。

八尾の最大の課題は史料収集不足（史料不足ではない）の克服である。報告では現存文書に

多くの改変が見られたことを指摘したが、推論の域を出ておらず、同年代の類似史料の発掘が急務である。もちろん、これは本研究の現地にはいけないという原則から逸脱するが、こうした史料のさらなる収集と中央編纂文書との比較が是非とも必要になってくる。

真栄平報告では南島地域の砂糖の問題に焦点を絞ったが、周知のように、奄美、琉球諸島は江戸時代の日本において最大の砂糖生産地であった。よって、その生産・流通・貿易をめぐる歴史的特質を検討することによって、<「中心—周辺」関係の類型化>という我が班のテーマに迫る必要がある。すなわち、砂糖という商品を手がかりに、幕藩制国家の中央市場（大阪）と周辺地域の南島（奄美、琉球）の生産—流通関係について考えることが当面の課題となる。

6. 研究業績（平成7年度発表分）

八尾隆生

「黎朝聖宗期の新開拓地を巡る中央政権と地方行政—安興碑文の分析」『東南アジア研究』33-2, pp. 1-26, 1995.

“*Khao sat ve Nien hieu Vua Le Nhan Tong*”, 『大阪外国語大学論集』13, pp. 195-206, 1995.

「林邑」桃木至朗編『平成2年度文部省科学研究費(海外学術研究)報告書』大阪大学, pp. 1-28, 1995.

深見純生

「歴史的背景」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいインドネシア(第2版)』弘文堂, pp. 1-45, 1995.

桃木至朗

「ベトナムができるまで」桜井由躬雄編『もっと知りたいベトナム(第2版)』弘文堂, pp. 62-81, 1995.

「社会主義農村の変化と伝統」『アジア読本 ヴェトナム』河出書房新社, pp. 56-63, 1995.

「広南阮氏と『ベトナム国家』」桃木至朗編『平成2年度文部省科学研究費(海外学術研究)報告書』大阪大学, pp. 29-53, 1995.

真栄平房昭

「沖縄研究と安良城盛昭」安良城盛昭編『日本封建社会成立史論 下巻』岩波書店, pp. 280-298, 1995.

「ペリー来航と沖縄—東アジアの近代を考える—視点」深沢徹編『オリエント幻想の中の沖縄』海風社 pp. 174-198, 1995.

「琉球ルートの海外情報」『月刊 歴史手帖』23-6, pp.17-24, 1995.

「江戸上りの旅と墓碑銘」『沖縄文化研究』21, pp.73-97, 1995.

「アジアへの関心と柳田国男(上)(下)」『UP』272: 6-9, 273: 11-15, 273, 1995.